

一月三日（火）

娘の小さな手を引いて、バスを降りた。交代乗務員の前を横切って、アルプラザへの横断歩道を渡る。寝起きでもご機嫌に歩いてくれている。

——パンと牛乳と、他に何かいる？

——卵かな。

——了解。

アルプラザは、まだまだ正月気分。ごった返す食品売り場で最低限のモノをカゴに入れ、お利口さんだった亜衣のご褒美にリンゴジュースも。後で芽衣に怒られるかな？ まあ、良いさ。

セルフレジを終え、アルプラザを出る。道なりに茨木川を越え、右に左に歩けば家に着く。誰も居ないつもりだったけど、灯りが点いている？ ドアを開ければ、見慣れない靴もある。

亜衣は空になったリンゴジュースを僕に渡し、自分で靴を脱いで中へ入った。リビングから芽衣と男性の「おかえり」が聞こえてくる。

「ああ、牧人くん」

「お邪魔してます」

芽衣に買い物袋を差し出し、リンゴジュースのパックを流しの脇へ置いた。背中のリュックをテーブルに降ろしながら、「ジュース飲ませちゃった。ごめんね」と謝ると「お出掛けだもんね。仕方ないよ」とパックを摘んで捨ててくれた。「お祖母さんどうだった？」

「元気にしてたよ。他のみんなもピンピンしてた」

リュックから、パイナップルケーキ、台湾茶、特別なパッケージのリプトン、南京町でも買えそうな月餅、調味料が出てくる。要らないと言ったのに、作りすぎたお節や手作りスイーツも入っていた。

「そっちはどうだった？」

「長男嫁の予定と映美の話で持ち切り」

「桃子さん、予定日いつだっけ？」

亜衣と戯れている義理の弟に視線を送る。牧人は、亜衣にアクロバットな高い高いを繰り出しながら、「今年のGWです」と答えた。「妊婦を一人にしてよかつたの？」と訊くと、「お義父さんの迎えで実家に行っちゃったんで、姉さんを送って行けって」と言った。

「それはありがとう。パイナップルケーキぐらいしかないけど、一つ持って帰る？」

「あ、じゃあ、いただきます」

要冷蔵の品々は、出した側から芽衣に片付けられていた。三本積み上げられていた山から、一本を牧人の方へ移す。

「ちよつと早いけど、晩ご飯も食べてく？」

芽衣は僕の隣に座り、飲みかけのコーヒーを飲む。僕は入れ替わりに空いたキツチンへ入り、蛇口を捻って手を洗う。

「いえいえ。もうお暇します」

牧人は、亜衣を床に下ろす。亜衣はまだまだ遊んで欲しそうにしがみつくが、

「ごめんね」と姪の頭を撫でながら、牧人は上着に手をかけた。芽衣は亜衣を手招きし、膝の上に座らせる。

「ゆつくりして行けばいいのに」

「ゆつくりしたいんですけど、向こうのお義父さんが『早く来い』らしいので」

牧人は上着を羽織り、スマホの画面を見た。返事を送ったのか、顔を上げた。

パイナップルケーキを持ってきた紙袋にしまい、そのまま玄関へ向かう。

「アレ、クルマ？」

「ええ。その辺のパーキングに」

「じゃあ、ガソリン代と料金だけ」

「いえいえ。また姉さんにはお世話になると思うんで」

玄関まで見送りに来た亜衣の頭を撫で、「じゃあね」と声をかけると、そのままドアの向こうへ出て行った。薄暗がりの中を近場の駐車場へ向かって颯爽と歩いていく。

さてさて、いつもの焼きそばをいつもの分量、作るとしますか。